増補
後樂園真景及詳誌

完

15-281
1200701628606
15
281
帝國圖書館藏

始

露光量違いの為重複撮影

DESCRIPTION OF

OKAYAMA KORAKUEN

後樂園眞景及詳誌 全

東京圖書館
門
類
十九函
架
二八一號
一冊

七十六翁崖寫

露光量違いの為重複撮影

DESCRIPTION OF
OKAYAMA KORAKUEN

後樂園眞景及詳誌 全

東京圖書館

門	類	函	架	號	冊
		十九		二八一	一

露光量違いの為重複撮影

DESCRIPTION OF

OKAYAMAKORAKUEN

侍從長兼內大臣正二位勳一等侯爵德大寺實則公題詠
舊岡山藩主正二位勳三等池田茂政公題詠　岡山縣知事從四位勳三等千坂高雅君序文
岡山縣書記官正七位坂本釤之助君題詩　衆議院議員謦軒坂田丈平君序文及詩
衆議院議員徽山西毅一君序文　思軒森田文藏君序文
岡山縣尋常中學校敎諭小田堅立君英文序
岡山縣尋常師範學校助敎諭梅園岡直廬君序文及諸勝雜詠

後樂園真景及詳誌

附後樂園及岡山市平面圖

松莊多田省一君題詩及諸勝雜詠　諸大家吟詠
大藏省參事官從六位文學士坂谷芳郎君英文序
米國學士レベレンド、ゼームスペテー君英文序
岡山縣尋常中學校御傭敎師米國學士ムラー君閲
岡山縣尋常中學校敎諭小田堅立君英文說明
讀紫樓主人記述　秀美堂主人密書

岡山細謹舍發兌
Saikinsha, Kaminocho, Okayama.

露光量違いの為重複撮影

後樂園より
侍従長徳大寺
[illegible]

DESCRIPTION OF
OKAYAMAKORAKUEN

侍從長兼內大臣正二位勳一等侯爵德大寺實則公題詠
舊岡山藩主正二位勳三等池田茂政公題詠　岡山縣知事從四位勳三等千坂高雅君序文
岡山縣書記官正七位坂本釤之助君題詩　衆議院議員警軒坂田丈平君序文及詩
衆議院議員薇山西毅一君序文　思軒森田文藏君序文
岡山縣尋常中學校教諭小田堅立君英文序
岡山縣尋常師範學校助教諭梅園岡直廬君序文及諸勝雜詠

後樂園真景及詳誌

附後樂園及岡山市平面圖

松莊多田省一君題詩及諸勝雜詠　諸大家吟詠
大藏省參事官從六位文學士坂谷芳郎君英文序
米國學士レベレンド、ゼームスペテー君英文序
岡山縣尋常中學校御傭教師米國學士ムラー君閲
岡山縣尋常中學校教諭小田堅立君英文說明
讀紫樓主人記述　秀美堂主人密畵

岡山細謹舍發兌
Saikinsha, Kaminocho, Okayama.

露光量違いの為重複撮影

みんなく國民好收
まなのしむ國贄題
新年の春

流店の兵祇いと清きに
をふし年
行き事のとり船なとと致
ちる角里し於見をないして
御氣しきたとふうるもし
かりし於田思ひあて

従二位池田茂政

露光量違いの為重複撮影

流石の末も以て清きに
もなし年
行幸のとり船なと数
志る里し御見そなはして
御感しきたまふよしも
かりし池田思ひあて

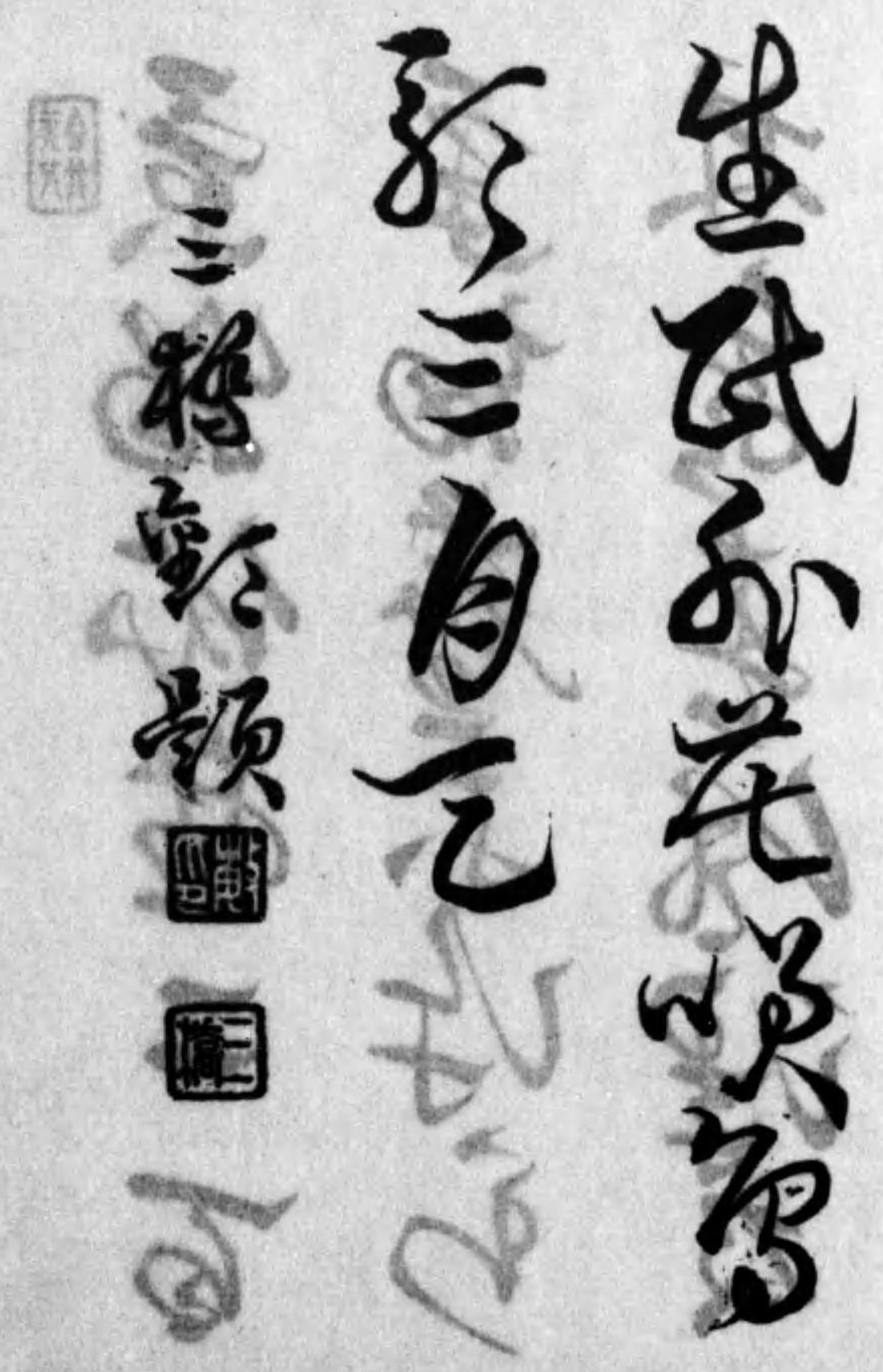
従二位池田茂政

草村い河の
なかゆく清水
掬ても
君かありける
わすれましや

泉石花木風色皆可愛也
蓋此園池田侯先世之所
経始其遺德長在人一花
一艸亦甘棠也余有暇
則徜徉於此不獨其風

景之義焉亦深有所感
於心也有人齎此冊請
余題乃書其焉
癸巳桂月　梁溪

京物依然二百
年翻盡亦許多
林泉表風澤及



序

山陽一道。蜿蜒擁內海富于山水勝地。其尤著者。東有須磨舞子。西有嚴島鞆津。是皆以天成之勝。怡行客之目者也。其在中間以人工聚天成諸勝者。獨有岡山後樂園而已天成之勝淵大渾厚。無斧鑿之痕則雖可悅按排衆景于數頃之地。使觀客作忽在湖海。忽在林邱忽在樓臺之想者不如人工之愈也而園之勝未大著者何哉。近者山陽鉄路。從神戶起工將達三原。北村氏曰。是發揚園勝之時至矣。乃編後樂園眞景詳誌。以公于世。此書一出焉。園之勝得以著于遠邇。行客喜得怡目之便也可知矣。且人之自東西過岡山者。先賞須磨嚴島諸勝之天然。然後至岡山縮合東西山水于一園。而觀之。則知人工之美果有勝天成者矣。又併知人工之不可以已矣。凡天成之物必施人工。而後益得貴重。顧本邦海陸之利依天成而人工未至者何限。嗚呼人工之不可以已者不獨勝區也。序以瀆觀客。

明治二十四年七月上浣

警軒　潜夫　丈撰

叙

天橋松洲嚴島之景。琵湖芙峯之山光水色。水富鱗介魚鼈。山多金銀銅鐵。風淳而俗美。以表于東海者。是豈非我大八洲乎。異邦人稱之。曰蓬莱神仙君子之國。亦宜矣。禀生於此樂土。朝壽嚴島之花。夕泛松洲之月。一瞬千里。經琵湖。望芙峯。觀名城大都魏闕之壯且大。以壯其意氣。北遊南息。以窮人間之快樂者。豈非亦人文開明鐵路交通之賜乎。東備鳥城之側。有名園焉。邱壑竹樹茂林嘉卉泉石池塘之趣。幽邃明媚。天空海濶。樓臺閣榭殿堂亭宇之設。宜月宜花。四時之風光。莫不備具。殆奪化工云。備人誇稱謂之小琵湖小芙峯矣。又謂之天橋松洲嚴島之景皆備矣。又復謂之蓬莱瀛洲神山之縮地矣。其言當否。今有眞景詳誌之著。余不復贅。近頃得滊車之便。其名益顯。自西自東。都鄙騒人墨客。縉紳士女。絡繹來遊。扇影衣香。婆娑逍遙。坐花醉月。歌舞歡笑。以爲樂土別乾坤矣。人々遊此樂土仙郷。窮其快樂者。何也。余一言以蔽

之。曰錢。若無錢而遊。樂變而爲苦。雖有樂土仙鄕。豈能得窮其樂乎。果有錢焉。衣食足而知禮節。於是乎。夫婦相携。老幼相扶。朋友相共。無翼而飛。無足而奔。得以窮其快樂矣。嗚呼錢耶錢耶。得錢之道。何如。曰勤。勤而後有眞個快樂也。此園名曰後樂。有旨哉。有旨哉。因序

歲次辛卯夏六月於閑谷山中白雲深處

忙仙 西毅一 撰

序

西人雅言。善勞善逸。善逸卽善勞也。故西人所栖。陬邑孤驛。亦必有公園。有環馬場。有打毬走冰之戲。賽花賽跑之會。日夕歲餘。士女群行。游玩歡娛。皆所以舒暢氣血。而宜養逸也。近時邦人視事操業。一法西人。刻晷計程。孜孜營營。善勞之風。將漸遍都鄙焉。則公園游玩之設。亦不可已矣。岡山後樂園。舊池田侯別墅。藩廢。納官爲公園。於是。往者靈臺雪宮。今也庶民群嬉。爲討樂之鄕矣。頃細謹舍主人。爲志其變遷。與沼池亭榭之勝。欲以指南游者。既成。郵寄問可否余。昔在宋李文叔。作洛陽名園記。謂洛陽名園之興衰。天下治亂之候也。余感此園之變遷。有關於天下文明之運。故序而返之。若其沼池亭榭之勝。游者自覽之。余何贅。

明治二十六年八月於東京根岸僑居

思軒 森田文藏 撰

題後樂園詳誌

他日入廬山、我亦非生客、此是蘇子瞻、評子由文格、其文叙風光、一々如指畫、故謂初入山、猶曾著游屐、後樂園詳誌、搔痒靴不隔、文優叙縁由、盡密寫泉石、突兀又紆回、水明寫山碧、池清魚啄苔、林靜鶴歛翮、花開紅千點、松老翠千尺、楓葉帶霜紅、梅花含雪白、紫藤眠歪舫、蘇鉄噴手戟、觀月樓臺高、賣茶草庵窄、錯落又離披、山勢隨地脈、昔時秘斯景、王侯之所宅、今也許縱觀、遊人來絡繹、一觀此風光、遺忘誰不惜、故爲游人謀、覼縷著斯册、雖非子由文、分明留勝跡、

松莊主人省拜題

A History and Brief Description of Koraku En.

By Kenlieu Oda.

The words "Ko Raku En," mean literally, "after pleasure garden," and the terse expression "Koraku" had its origin in a saying of a good emperor of China who lived hundreds of years ago. After he had made a garden, he was asked by a subject if the sovereign enjoyed the pleasure of such a garden. In reply, he said: "We enjoy pleasure after the people." To enjoy pleasure after the people, seems to be the true enjoyment of the sovereign. Such a sovereign is, we think, the true parent of the people, and such a parent, we believe, was Tsunamasa Ikeda who laid out Koraku En.

Tsunamasa Ikeda who was the lord of the province of Bizen and an ancestor of the present Marquis Ikeda, succeeded his father whose good government had made the people happy through out his province and finding that his people enjoyed their lives he began to think of enjoying himself by making a pleasure ground which was well-named Koraku En the garden "enjoyed after."

In the fourth year of Teikio (1687) he appointed his subject Nagatada Tsuda a well-known engineer of the time to carry out his plan for the garden. The work was commenced the next year and required several years for its completion. At first, less than fifteen acres were enclosed. About a hundred years later, over seven acres were added, so the garden contains now more than twenty-two acres.

The garden is situated on the north-eastern edge of the city of Okayama. It is on the bank of the river, with the old castle standing high on the opposite side of the water surrounded, on all sides, by ever-green hedges, and approached by a bridge, and it gives one a conception of its beauty at the first sight. A step within the gate, a single glance, and the conception is realized. The grove of old

これの後樂園はしも、玉たれの岡山の里の、眞中をおかるゝ
あかねさす旭の川の川岸にありて、いともくめでたく樂
しき園になん。むかし、此國あつかりしらしゝ池田の君の、も
のせられしとかや。さて園のさまは、つゝみにあまたの竹お
ひ、ろをそて、めくりに垣しわたし、うちには山あり池ありま
た島ありて、とほくは、ひむかしの山々を見渡し、ちかくは庭
の千くさのなかめあそて、春さきは梅の花まつさき、青柳の
かつらにすへくなるころは鶯のこゑ、みゝなれぬべく、まし
てに、つゝじのにほはん時の櫻花さきなん時は、百八十のを
とめがともの赤らひく袖ふりはへて花かけを、かゆきかく
ゆき、ますらをの中にまじりて、花にゑひあろうべるからに、ほ
どもなく、池の藤波さきかゝりて、山ほとゝぎす、まちがほな
るもまたをかし。秋になれは萩尾花露おきそへて、あし引の
山のをしかのふしどもなりぬべう、みいさるほどに、千しほ

pine trees, the thickets of bamboo, the clumps of cherry trees, plum trees, and maples, the pond in the centre and its lovely island, a stream of running water, the miniature hills covered with shrubs, and, scattered here and there, several small houses whose quaint structure is well in keeing with the natural beauties—a few glances, show all this, a veritable "happy valley." Until nine years ago, it was not open to the public, but with the revolution of 1867 and the consequent removel of the owner to Tokio, it came under the control of the government of the Okayama ken, and the long closed gate was, for the first time, opened to the public, as a public garden of the city. This simple history may add to the interest of visitors to one of the "three gardens" of the Empire, and may tell how it came to be the centre of attraction of the city.

Okayama Academy, Oct., 1893.

の森の紅葉をまたまよなうころ。さて冬にいたればたけ高
き松の梢につくしのわたきせたらんやうに雪のふりたる
あしたそこにみどころはありける。かくをり〳〵のなが
めつきせぬ園なれば玉しきの都をはじめて、ちかき里々の
人ともは、ときじくにきいりつどひて、めてくつがへるを、ほ
まらひがほに、がくいふものは園のむかひなるがくれがに
すめる

岡直廬

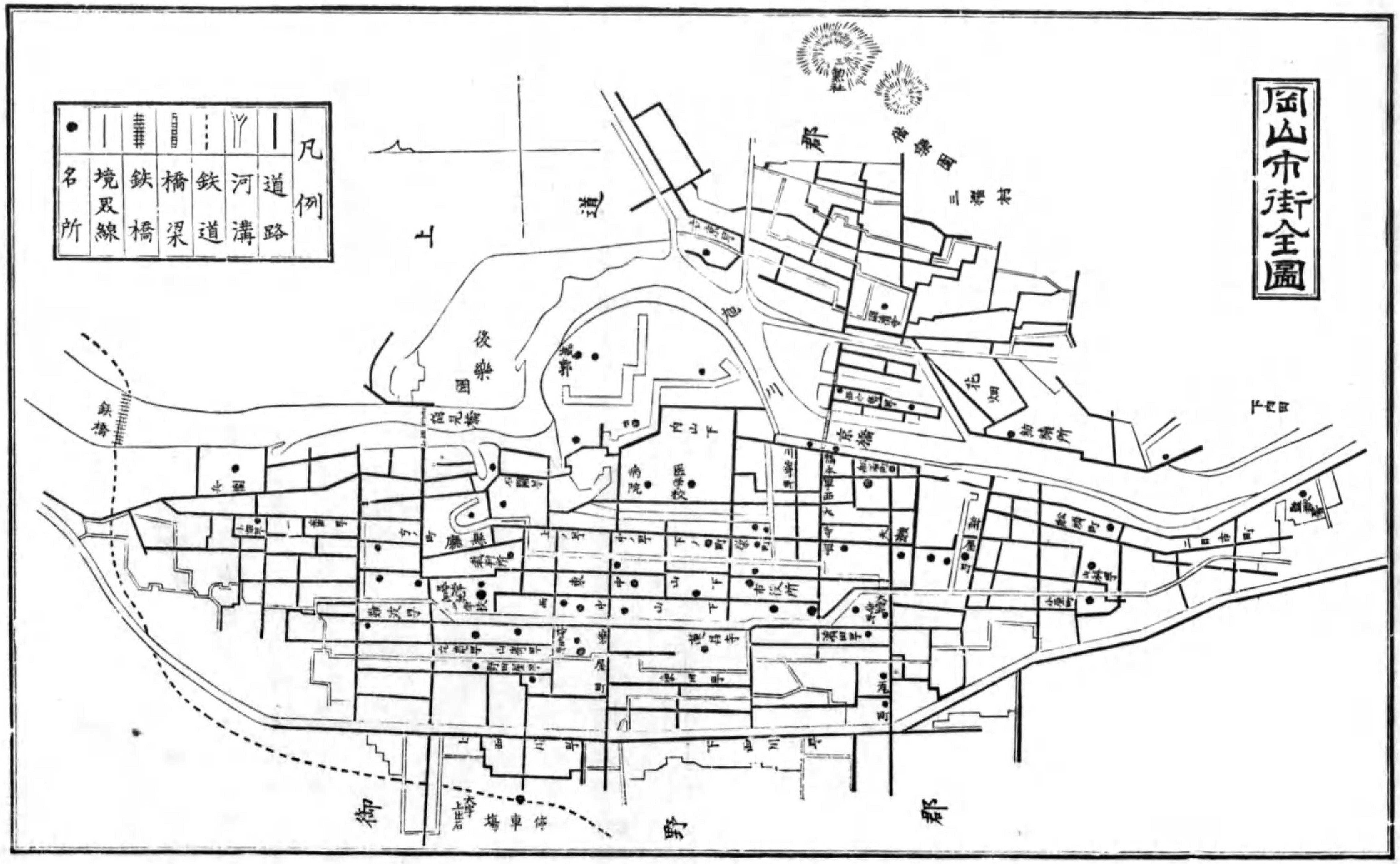
後樂園眞景及詳誌序

天下の憂に先ちて憂ひ、天下の樂に後れて樂む者は仁人君子の事なり、而して世、其人稀なり。余の見るところによれば芳烈池田侯の如き豈、其人耶、侯深く心を國政に用ひ、人材を登庸し、學館を建設し、其治蹟の顯著なる、世人の夙に知る所、其封を備前に移すや、國未だ開けず、民未だ富まず、侯深く之を憂ひ、衣服を粗にし、宮室を卑にし、未だ嘗て一日も安居せず。是を以て封土の內人民其堵に安んじ、皆な侯の德を仰がざるなし。侯薨じて後、封を襲ぐものを曹源侯とす。後樂園は實に侯の經營するところなり。蓋し侯の時に當り、國既に開け、民既に富み、應に以て民と供に樂むべき也。卽はち後樂の園を經營するもの、亦實に斯意にして、徒らに驕奢に因て臺池を搆ふものならんや。況んや今日廣く園を開き、衆庶の觀覽に供するをや。然らば則はち芳烈侯の勤儉自ら守り、侯の子孫の其民と共に太平に謳歌するもの、豈に侯の天下の憂に先ちて憂ひ、天下の樂に後れて樂むを以てするにあらず耶。余之を聞く、後樂園は日本三公園の一にして、臺池の建設、樹木の配置、總て其宜きを得、又、他所の能く及ぶところにあらず、と。余常に斯園に徜徉し、以て

自ら樂む。今茲辛卯初夏、筆硯閑あり、乃はち日に斯園に遊び詳に家屋臺池の在る所を窮む。一日彫工秀美堂といふ者と相逢ふ、主人突如として余に謂て曰く、我技未だ熟せずと雖も、奮ふて其眞を寫し以て世に園の光景の佳なるを示さん、希くば君爲に記せよ、と。余曰く善し、と。乃はち一枝の鉛筆を倩ひ、復た園内を徜徉し、其光景及地位を寫す而して主人の拾ふ所の眞景を視れば則はち茲に拾餘幀を得たり。余素より不文、此園の爲に光輝を發するに足ずといへども、而も主人の能く其眞を摸もるあり、亦以て未だ斯園に遊ばざる者の指南車に當べき也。抑も余亦感あり、今や、聖明上に在り、海内事無く、人民皆其業に安んじ、各其處を得、國家の寧靜なる、固より以て封建時代の苟安なるの比に非るなり、而して余の日に斯園に徜徉し、妄りに毛穎子を役し、其眞景を記し、主人の之を摸寫して其技を顯すもの、豈昭代の餘澤にあらず耶。是れ斯園に遊ぶ者の亦た思はざるべからざるところ也。書成る、之を書して序となす。」

明治辛卯夏五月緑蔭幽草深處に於て

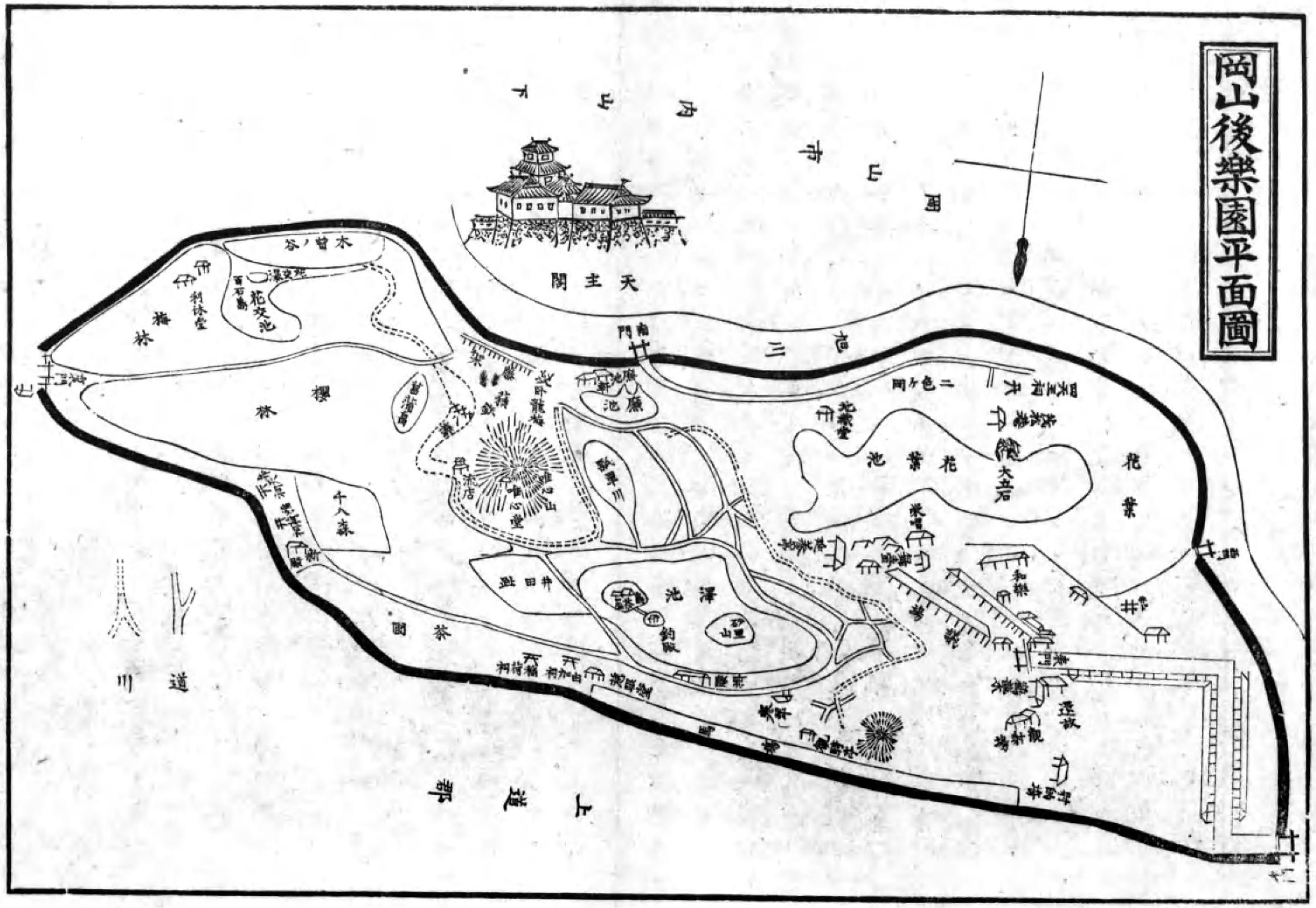
鉛堂居士しるす



に遊ばざる者の指南車に當べき也。抑も余亦感あり、今や、聖明上に在り、海内事無く、人民皆其業に安んじ、各其處を得、國家の寧靜なる、固より以て封建時代の苟安なるの比に非るなり、而して余の日に斯園に徜徉し、妄りに毛穎子を役し、其眞景を記し、主人の之を摸寫して其技を顯すもの、豈、昭代の餘澤にあらずや。是れ斯園に遊ぶ者の亦た思はざるべからざるところ也。書成る、之を書して序となす。』

明治辛卯夏五月綠蔭幽草深處に於て

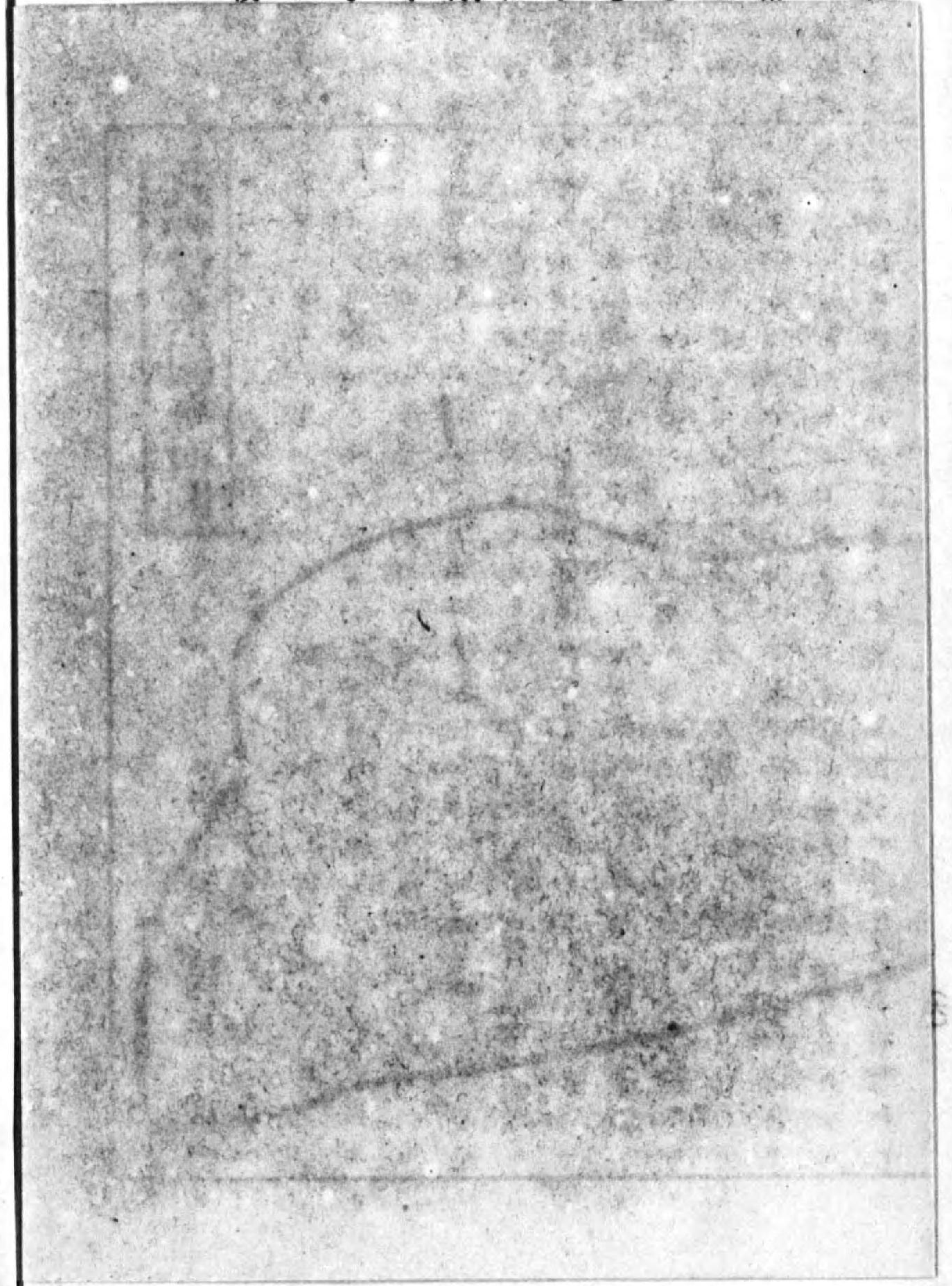
豁堂居士しるす


岡山後樂園平面圖
天主閣
岡山市内山下
旭川
南門
木曽ノ谷
梅林
櫻林
花交池
花葉池
花葉
大立石
澤池
廉池
千入森
井田
茶園
唯心山
慈眼堂
流店
釣殿
道川
上道郡

増補 後樂園眞景及詳誌

庭園總叙

曠川三十餘里、源を美作國龍王の池に發し、回り環りて岡山の街を貫き、終に流れて兒島の灣に入る。其西岸に屹然として高く聳ゆる天主閣は是ぞ名に負ふ烏鵠城。城の北に流を隔て、一區を畫して、東西南北竹林に囲はるゝものは、日本三公園の一として世に知られたる後樂園なり。園の創始を討ぬれば、今は昔、貞亨三年のことなり。備前の國主左少將池田綱政朝臣の其臣津田重次郎永忠に命じたまひ、工事を統轄せしめられ、翌る四年の十二月初めて着手することゝなり、反別凡そ壹萬七千七百餘歩と畫り、其後區域の狹きにより、元祿三年三月に、又園の北五千二百五十三坪を増加へ、續きて四千餘坪と合せ總計貳萬七千拾三坪餘とはなりたり、是れ現在の後樂園にて其周囲九百三十二間、園の中央と東西に計れば長さ百九十七間餘、南と北の廣さと問へば百十七間に餘れるなり。地勢は南と西の方較や高くして岡のごとく、樹木生ひ茂りて深山の趣あり、北と東は平坦にて北は松林蓊鬱とし東は園外を望むべし。抑も斯園の設けたる、特り遊樂のためならず、或は演武の場を置きて、諸般の武藝を演習し、或は田畝の型を造り



て、國主親しく農民稼穡の艱難を視察せり。其名、初め茶屋屋敷と呼び、後には單に後園といひ、明治四年二月に至り、今の名には改め、尚は池田家の私有なりしに、同十七年二月、政府は池田章政侯の請を許して地を納め、岡山縣にて保存することゝなり、始めて公園とはなりたりき。明治十八年車駕西巡の折から、此處を行在所とし、玉座を延養亭に設けしに、園中の光景殊の外叡慮に副ひ、供奉の官人も深く其結搆を嘆美し、此より名園の稱四方に聽え、知ると知らさると岡山の後樂園の名を聽て、皆ゐ其觀望に富むことを思はざるものなきに至れり。われ請ふ其池臺亭館の重なるものゝ位地廣狹、サテは沿革を寫し出して、斯園に遊ぶものゝ參考とせん。

題後樂園　　警軒　阪田丈平

萬人饒賞比靈臺、後樂之園孰競魁、幾處名區斯採聚、當年少將所創開、扨而魚躍
沼池水、馴有鶴銜庭砌苔、父老於今仰遺德、慇懃護勝徘徊、

桐陽　大村斐夫

靈沼靈臺結搆全、乾坤別闢十洲仙、長渠短閘高抵水、嫩草平沙青白氈、天龍一降
皆蒙澤、野鶴群鳴似有權、眼中無物不奇古、自創名園二百年、

不知娭齋　馬場毅

欲見公園鶴、已過鶴見橋、園濶方一里、山色鬱岩嶢、楓葉紅千樹、夕陽秋色燒、松
樹歲寒色、千歲綠不消、異艸花更叢、奇木葉迭凋、樓園殊壯麗、怪麗危石饒、奪天
工鬼工、巨靈手自雕、滄池引泉水、恩波浴々漂、維昔賢者君、綱政公所作、此園即
靈囿、麀鹿便濯々、此樓即靈臺、白鳥便鶴々、此池即靈沼、於扨便魚躍、公而有此
名、賢者而後樂、

西疇　原田隆

一尊春酒撥香杉。醉裡俱忘世味鹹花。影横檐簾影合。鳥聲隔竹水聲銜。名園已
屬新天地。仙境猶存古巖巉。只恨昔人呼不起。百間濠上送歸帆。

游後樂園　　大村斐

烏城每抵此吟游、下有淸池上有邱、晴雨四時哥且好、梅花楓葉歲春秋、
樓臺泉石別乾坤、滿苑白沙皆帶痕、士女遊春來拾勝、無人不沐舊君恩、
仙鄉無復著纎氛、山媚水明形勝分、特立昂然松下鶴、知佗名苑盡雞群、

不知娭齋　馬場毅

憶曾鑾輅一宵停、即是園中延養亭、李雪撲魚々氣白、松濤颭鶴々音青、四時不
斷花開落、終歲來遊客醉醒、豈啻賢人而後樂、民皆爲小又爲靈、

碧山樵者　高橋圭介

築遣高低阜、鑿成萬頃湖、不容街市鬧、自是小仙區、板橋通樹際、丘阜繞池塘、許我自由步、不知及夕陽、

田邊　華

縹緲衣衫飄、遥入春雲白、莫赴瑤臺宴、想是羅浮客、美人來何遲、贈以明月璧、横斜旋出烟、寒香醒我魄、不知來時路、身落梅花國、隱花認麗譙、春雲仙凡隔、嗟我風塵中、幽心久形役、願得從逋仙、花裏來卜宅、春風無隙地、遍種梅千百、酒醒愁如水、唯覺雲生屐、老鶴警春寒、月墜烟下碧、

後樂園雜咏

中洲　三島　毅

殿閣參差松竹脩、四來雅客領清幽、先王偕衆一時耳、不及千秋後樂遊、

寧齋　野口　弌

三旬留滯在黄薇、時節剛逢梅子肥、緑樹陰々天放霽、麗譙午影帶清暉、一樓賓主酒中仙、醉倚欄干曲々前、便有鶴聲鳴不盡、在雲深處幾蹁躚、

藤水　東馬　安

操山塔影映幽階、泉石殊添風致佳、延養亭邊鶴鳴斷、蒼然暮色冷吟懷、

松坡　德田　廣

野趣秀而花竹圍、入園先覺世情非、依稀風景孤山似、一隻仙禽導客飛、

豪谷　衣笠　縉侯

名園自古有名譽、况復前年駐鳳輿、御愛猶留松上鶴、聖恩長浴水中魚、迎風白玉梅唇笑、經雨黄金柳髮梳、清世幸逢詩酒會、從容半日俗緣虚、

淡香　村山　奬吾

園角別開梅一區、依稀光景似西湖、水涵疎影襯池底、風送暗香盈坐隅、片々花粘仙鶴背、斑々苔蝕古獅鬚、固有陶造獅子像、閑游好是陶然醉、待月林邊學老逋、

猿山　荒木　忠

園中幽趣似林溪、看到梅花植杖藜、皆逕痕荒春尚淺、酒筵談熟日將西、含香飛雪迎風舞、攫玉蟠龍臨水低、如個游娛又難得、廿餘騷客手俱攜、

秦川　池上　誼

春風到處鳥欣々、吾亦名園會以文、馥郁梅欺千樹雪、老蒼松聳半空雲、巡行駐駕今天子、經始勞心古國君、欲寫騷人多少感、微吟把筆坐斜曛、

後樂園

小野　春發

あしたつもちとせの後はたのまんと君かそのふになれやそめけん

藤原　忠朝

花もみちめに見るはかにすむ鶴の千代のこゑきくそのそ樂しき

小原頼高

大きみのみゆきにあひてあしたつも雲井にあそぶおもひありけん

森芳滋

山水のすかたうつせるこのそのはいくよの後もたのしかるらん

花もみぢひとをさそひてはるあきのながめひまなき園にも有かな

八十一翁 正七位 林孚一

もろ人のいとたのしげにあそぶこそひしりの御代に逢はなりけれ

正七位 手代木勝任

さやけしなありし行幸のあとゝめてこずゑをはらふ園のまつ風

片岡正占

こゝもまた底より水の吹上げの御そのおはゆるこゝちせられて

川崎田豆雄

島このみつくれる園の秋の夜は月の御船もこゝによらなん

武田信敬

君か代の千代よはひつゝ松かけにいとたのしくもあそぶ鶴かな

大野好蔭

あし田鶴とゝもに遊ひてこの園は千年の後も樂しかるらん

大君の御幸にあひてこの園の鶴かね高く世にひゞくなり

淺野駒子

世の中のうさに先立國民の後に樂しむそのは此その

國富直麿

あしたつのなるゝ園生にきてみれは仙人さひしこゝちこそすれ

島村清則

千年へん鶴も御幸にあひしよりなほ一しほのよはひのふらん

後樂園といふことを

從七位 戸田則素

世のうさにさきたつひとの後れきてともにたのしむそのはこの園

岡千春

れよひをはよしきらるとも一枝を手折らてやまん花ならなくに

木村保

花のあした月のよをにつとへとも雪のなかめそ殊にさやけき

武田信博

ゆたかなる庭にねふれるあし田鶴はれのか千歳もやをけかはなる

岡田輔文

つはなぬく少女とゝもに立なれて芝生にあそふそのゝ友つる

矢定頼子

人あまた見れとも更におとろかぬたつはみ園のあるし顔なる

大庭に年ふる鶴の人馴れてあそへるさまもゆたか也けり

片岡寛

御園生になれてあそへるあしたつの心やいかにのとけかるらん

太田原眞當

から衣かへすくもきてをみむこの岡山のそのゝけしきは

鶴見橋　は近頃曠川に架たるものにて、岡山市出石町より後樂園に入るの道なり。往古は旭川の西岸に在る卷石の北の端より假橋を架たりしか、鶴見橋は其廢れたる後に架たるものにて、直に園の北門に通ずるを以て、寔に往古の假橋よりも却て便利を得たるがごとし。橋の長さ七拾間餘にて、寔に粗造なるものとす。橋を渡れば北門にて、墻と隔てゝ左に暫軒あり。屋を二字に分ち、搆造素樸なれども風致あり。窓を開けば直下に曠川と望み、北には秦嶺諸山を眺め、最も避暑に宜しく、往時暫軒風とて十勝の一なり。

池田家の後樂園を上地せるに當り、此邊のみは除きたれば、今尙は池田家の私有に屬し、妄りに入るを許さず。北門より南に當り、一町ばかりの處に、西門ありて、往古岡山藩主が園に往來する道なりしも、今は閉して平日は開かず。然れば園に入る者は北門より入るを常とす。門に入りて右に折れば屋舍東西に並べり、是れ往古園の奉行附屬吏員の住む處、此を過て東に行けば、左に一區の邸宅あり。之を還古と稱へ、往古は舊藩主の庶公子住居し、或は吏員集りて事を執る。建築坪數は五十六坪餘にて、艸葺瓦屋相交れり。其前面に保存掛の詰所あり、其東に門ありて、此を過れば左に鶴の籠屋あり。斯園は奇樹異艸各所に散在し、四時花無きことなけれども、禽獸の類は、往古より鶴を養ふのみにて、其多きときは十餘にも及ひたるが、今は其數五六にて、晝は之と園の中に放ちて、自由に蹁躚せしめ、晩に及べは、園丁之を驅て籠屋に入

(鶴見橋及暫軒之圖)

Tsuru mi bashi, and entrance to the park.

る。喉嚨の聲九皐に響き、斯仙境をして一層風趣を増しむ。門の右には玄關二ありて、東西に相並びて北に向き、其西なるは往古より設けしものにて東なるは鶴鳴館に出入する爲に、近頃置きしもの、其前に巨松一樹あり、龍蟠虎踞、偃蓋地を蔽ふ。傳へいふ、往古斯地の村落たりしとき、里正平四郎なる者ありて、此に住居を定めけるが、此樹は其庭に植ゑたるものにて、玄關の上に設けたる廣間は、平四の納屋の跡なりと。近き年まで其頃の古き柱のありけるが今はその遺物一も存せすといふ。』

鶴見橋　小原頼高

君が代のちとせとかけてつるみはしわたらぬ人もあらしとぞ思ふ

戸田則命

名もたかくきこえけるかな鶴見橋いく千代かけてわたしそめけん

暫軒　西川國臣

しはしとて立よる軒の涼しさにうきも忘れて今日も暮しつ

中塚正齊

立ちよれはなかめもあかぬ此軒にしはしてふ名は誰か負せけん

小山敬容

立よりてまたきしはしと思ふまに日はかたふきぬあくよしをなみ

正八位　河合就義

軒の名のしはしかはとゝたちよりしそてふきかへすそのゝ夕かせ

岡直廬

しはしとてたちよる軒に吹かよふかせさへもゝし川つらのいは

鶴鳴館は艸葺にて凡そ百四十坪餘あり。元は廣間と唱へられ、室を分ちて五ッとし、西には廡廊と設けて玄關に通し、東には二三の小室有り又臺所をも附屬て各々用を便じしが、今は全体を合併し、廣き一間に造り更へ、東の方にも廡廊を設け、圖中一の大廣間にして、岡山縣會を開くときは此を議場に宛つ。其他諸種の總會にて、多くの人を容るときは、大抵此を假らざるなし。其鶴鳴館と唱へしは、高崎五六の此縣に令たりしとき、扁額を書して掲げし時に

(鶴鳴館之圖)
Kwaku mei Kwan.

覩る。

鶴鳴館　　松莊　多田省一

喬松落々掩池臺、中有仙禽馴養來、夜半月明時一唳、露華如雨灑青苔、

鶴鳴館　　岡直盧

さをしかの聲きく園はありといへどたつかねたかしあはれこの園

太田原眞當

鶴のなくこゑをきゝつゝ名にしれふやかたに千代をへんよしもかな

延養亭

延養亭は園中の第一の建物にして鶴鳴館の東南に並び連り、艸葺と柿葺交りて七十七坪餘あり。往年車駕西巡の折から玉座を設けし處。其北の端に車寄を設けて昇降を通じしは、其時の事なりし。楣間に掲ぐる亭號の扁額は、舊藩主章政侯の筆にして此れ園中の正堂たり。其席四十四疊と容れ往時舊藩主の儒臣を延て講筵を開き、又近隣諸藩其他親戚、サテは諸藩の使節等招延して饗應する亦、多く此處なりし。南に接きて十疊及二十疊の二室あり、幅一間の疊椽東南に曲折し尚、其外に板椽あり。初め元祿三年閏九月津田永忠の命を承けて工事に着手し、其翌年に至り、先づ一堂を起しゝは、即はち此延養亭なり。位地は東と南に向ひ、眺望最も濶くして、岡山城の城櫓は高く南に聳へ、天主閣は來りて檐の外に落ち罌粟子、三椏其他の諸山は東に方りて屛列し、朝夕紫翠を送り來り、中にも瓶井山に屹立せる三層の塔は園に茂れる樹の中より、隱れつゝ見えつ、形を露はし、其風景の明美なる畫も亦た遠く及ばす。斯塔の建設は、略ぼ斯園の創始と、其年代を同くし、宛から斯園の眺望の爲に造りしごとくなり。而して園の諸名勝は概ね此より望むべく、孰も爭ふて奇を呈し、亭の前には奇石多く、其間より短き樹の簇り生て、点綴し、曠川より引く水は其中を横に流れ、斜に廉池に注ぐなり。前面は總て平地にて四方に通ずる徑路を除き、總て結縷草を植ゑ列ね、春夏の交には一面に青き毛氈と敷けるがごとく、遊客は三々五々隊を爲して、彼此に座と占め、夕陽西に沒するも知らずして歸るを忘れ、鶴亦たよく人に馴れ、常に來りて此間に羽を伸しつゝ徜徉し、苔を啄み、

(延養亭之圖)
En yo tei.

水を飲む。往古十勝を設けしとき「延養亭鶴」とて其一に數へられしなり。

延養亭の後に在りて、東に向へる室二席あり、其名を臨瀞亭と唱へ、廡の下に扁額あり、舊藩主治政朝臣の筆するところ、往時は点茶の用に供し、又藩主の休息所とし、一道の流、北より來りて其前を回り、亂石左右に屹ちて、水流るゝときは之に激し、潺湲響を爲して俗氣を洗ふに足る。

延養亭　松莊　多田省一

朱欄雕棟枕池塘、此是藩侯古別莊、勝地一從驚輅過、林花園艸復恩光、

武知高

山水風光聚一庭、森然竹樹四時青、名區勝地何須問、異個人間延養亭、

延養亭鶴　春峰　西川國臣

一從驚輿過、恩光溢草塘、如今池水靜、仙鶴一醉長、

延養亭鶴　西川國臣

芦田鶴と共に起ふすこの宿は千代のよはひそのふへかりける

延養亭　小山敬容

庭の面にれりゐてあそぶつる見ればよはひものふる心地こそすれ

島村清則

此園にいりこん人はまつあふけ君いこはしゝ行宮のあと

岡直盧

あしたつのむれゐるみれはいはの名の
のふるよはひもまつしらされけり

榮唱は一に望湖閣といふ。延養亭の西北に在り。大さ五十七坪にして、席の廣さ七十疊、柿葺の回廊を架けて斜めに延養亭に通じ、池の眺望最も宜しく、東南は廡廊を以て回らし、其前に花菜の池ありて、此邊幽雅類なく、池の中央に板橋ありて斜に二色の岡に通ぜしも、今は廢れて其跡なく、往古は榮唱橋とて、十勝の一に數へられし。其西南に巨石あり、池に臨みて屹立し、高さ四間一尺、周圍は十三尋にも餘るべく、松樹ありて巖腹に生へ、其奇狀觀るべし、俗に之を大立石と呼ぶ。傳へいふ斯園を開くの初め、犬島より齎し來れる者にして、運送の難きがため、其數を九十個に割き、此に据ると

(望湖閣(榮唱)之圖)
Boko kaku.

き、再び舊の形になせしものなりと。其側に楓樹あり、一條院と稱し、最と早く紅に染め出し、明媚比なく、榮唱より望めは殊に雅致あり。榮唱の北に舞臺あり、寛永四年建築するところにして、柿葺總計四十六坪餘、舞臺の三方に間地を剩し、一面に小石を敷き、楣上に蟠龍膽を附けたるは、池田家の標章なるが故なり。樂と演するときには、榮唱の北手なる障紙を開き、觀覽を便にす。榮唱の西に接き小座敷あり、方竹の柱あるがゆゑに、方竹の間といふ。其の西北に方り、東に向ひ舞臺の右に在るを墨流しの間と唱へ東の方を開き放ちて觀樂に便にす。其大さ二十三坪餘、室を三に分ち、總て二十六疊を容る。其の西に接する者を和樂といひ、猿樂を興行するの日以て樂屋となすものにて、東に廣き廊あり、右に幕口ありて、橋懸に通じ、斜に舞臺に連る」此大さ三十九坪餘、大小合せて九室に分ち、南に向へり。其東北には嘗て演武場を設け、舊藩主の師範役を延き武技を演し、或は諸士を召して其技を觀しかども、今は廢れて知るものなし。』

望湖閣　　　　松莊　多田省一

高閣入秋風色増、蟲聲露氣夜清澄、湖心魚躍金波亂、月上城樓第幾層、游魚躍處浮萍動、麀鹿伏邊紅葉堆、藩主當年玆行樂、望湖閣即是靈臺、

望湖閣　　　　上森操子

見わたせばみつうみの波しつまりて夕日かゝよふれきつしまやま

　　　　岡直盧

みつうみの沖をはるけみ見渡せは岩村かくれかもめたちたつ

花葉は和樂榮唱の南に方れる園地と稱するなり。北に門ありて、其外面は直に西門に通ず、之と花葉口と稱へ、平素閉して出入を許さず。其門より內は地勢高く秀で、自から岡阜の狀をなし、喬樹千章、蓊鬱枝を交へ、四時日光を遮り、緑苔地を蔽て常に清風を貯へ、幽邃高遠にして、深山幽谷の趣あり、炎熱堪かたきときといへども一び足を此に移せは忽ち清涼の身に濕ふを覺ふ。樹木の稠密なるは、園中此境を以て第一とし、花時遊客雜沓するも此境は人多く至らす。全く雅流の賞玩するところたり。其間小石を

（大立石及二色ヶ岡之圖）
Great Standing Rock, and Nishiki ga oka.

布置して一條の徑路を通じ、之に沿ふて行けば茂松庵あり。』

茂松庵

茂松庵は茶室にして往時舊藩主の茶事を修むるところ、今尚其形を存す、屋は藁葺にて廣さ二十二坪餘、室を分ちて三とし上を四疊半とし所謂る茶寮にて、其下と六疊八疊の二とし、全体の搆造、素樸にして、雅致あり、老松喬柏茂鬱して檐を蔽ひ、吟籟耳に充て、而も喧しからず、試みに此室に坐すれば、幽深靜寂、眞に塵世を忘るの想あらしむ。其南に柿葺の堂あり、即ち四天王堂にて、廣さ二坪餘、夫より東北に方りて堂あり、即ち地藏堂にて、本堂は柿葺、拜殿は杉皮葺とし、華表、石燈籠等備はれり。造營の年期詳かならざるも、舊藩主の鎭主神として、安置せし者なり。古雅にして威禮あるがごとし。其側に石標ありて、二色ヶ岡の字を彫れり、地勢峻高にして池水其下を廻る。磴路を下る數十歩にして水千に達す、其對岸は榮唱にて較東なるは延養亭なり。池水一碧、東西五十七間延び南北十二間に廣り、周囲は凡そ百三十間、其東の阜の下に、水彎曲して、南の方小き灣を爲すところ、閘門を設けて、水溢るれば、頓て之を曦川に注ぐ、其東に地勢突起し樹竹相交り、奇石相疊み自から溪壑の趣を爲し、其間小泉懸りて池中に入る、其源は園の中央なる澤池にて、此より水道を通じ、混々として流れ來れるなり。傳へいふ二色ヶ岡は往古花樹多く「二色ヶ岡花」とて十勝の一に數へられしが、今は稀にして、唯楓樹のみ枝を延し、冬の初には粲爛として、錦を織るがごとく、亦是れ一の奇觀にて「にしき」の名に負かずといふべきか。』

茂松庵　松莊　多田省一

茅庵十笏地三弓、環堵設門幽徑通、落々喬松陰合下、茶煙一榻起清風、

武知高

雨餘翠色轉分明、暫坐茅庵忘世情、好是閑人會清友、茶聲沸々和松聲、

茂松庵　中塚正齊

ふかみどり千代もかはらぬ色見えて
またの行幸を松の下いほ

岡直廬

しけりあふ深山のおくの一家に
たゞ松風の音のみぞする

二色岡　西川國臣

(茂松庵之圖)
Mosho An.

名にしおふにしきか岡は花もなし秋來てめてん木々の錦を
國富直麿

故郷に折りてかへらんよしもかなにしきの岡の木々のもみち葉
矢定頼子

薄きこきもみちの色とこきまぜてこれやにしきの岡といふらん

廉池軒

二色ヶ岡より竹林に沿ふて東に行けば右に一の門あり、之を南門といひ、旭川を隔てゝ、岡山城閣と相對す。往時舊藩主の城中より舟に乘りて、園に入りたる處にて、今は閉て開くこと稀なり。其東に艸葺、柿葺、相接りて建るものは、廉池軒といひ、園中の諸勝を望むには、第一の場所なり。屋の廣さ貳拾壹坪餘にて、二室に分ち、總て十四疊とし、別に爨炊の室を設け、賓客を接待するの便に供す。後は竹林と隔てゝ、旭川に隣り軸艫咿軋の響は、舟子謳歌の聲と交はり、坐がら船の上下もるを知るべく、軒の前は池を鑿ち其周圍五十五間餘、所謂る廉池にて、溝渠索廻し、自から溪川の趣を爲し、石橋を架て、往來を通じ、其東の端には、地下に水道を設け、之を北に通じ、一條の流となりて、唯心山の麓に注ぎ、又溝渠より閘門を設けて、下に注がしめ、流れて一の泓池となり、水の上下に注ぐところ、一目高低を倂せ見る。是れ亦園中の一奇觀たり。軒に坐して、眼を放ては、唯心山東北に聳へ延養亭西北に當り、澤池の水は溶々として流長へに清く、北林の松は青々として色愈よ深し。人の客を伴ふて、此園に遊ぶ者は多く斯亭を借りて、饗宴を設け、以て眺矚を縱にせしむ。』

淪漪細々動涼思、寛坐小軒衣袖披、一掃塵懷
廉池軒　松莊　多田省一
奬如水、清風時起自廉池、

廉池軒　岡直盧
をすのとの池のさゝ波よりくに
人もこそよれうましこのいは

藤架

二架に分れ、西に在る者は、花白く東に在る者廉池軒の東に藤の架あり。東西は、花紫にして、其幹太く、凡そ數十歩の間に延び、紫白色を競ひて、其花を垂る、亦是れ初夏の一奇觀といふべし。側に老梅一樹あり、蟠屈枝を垂れ、樹幹苔に纏はれて、奇古觀るべく、其花開くに方りて

(廉池軒之圖)
Ren chi ken

は色白く、香清く、幽韻餘あり、名けて臥龍梅といふ名を其姿態に取るなり。』

藤之棚　　松莊　多田省一

老藤花發一重々、棚下清陰夏色濃、風起忽疑鱗爪動、横身十丈紫虬龍、

西川國臣

藤の棚

藤浪の花にこゝろをひかされて立よる人の多くもあるかな

太田原頁當

藤のたな夏きてみれは紫のなみうちかけて花咲にけり

岡直盧

此そのゝなかめはつきし春すきて夏にもかゝる藤波のはな

蘇鐵　藤架の北に方りて、鐵幹數十株赤沙の間に蟠るもの蘇鐵なり。或は長高くして廣く葉を張るあり、或は幹太くして横に枝を延すあり。其下清く掃ふて、一微艸を止めず。四方回ふすに、鐵線の垣を以てす。其東に渠を鑿ち多く燕子花を生ず。其種一ならず、近年亦名種を撰みて數十株を植う、側に板橋を架けり、其數八枚、交互往來の便に供も、即はち參河の八橋に疑せるものなり。』

蘇鎮園　　松莊　多田省一

皆屨鎮幹自輪囷、紅紫圖中牟釆新、彷彿蠶眉偉男子、稜々意氣壓佳人、

鎮骨鱗身亦異哉、頑然兀立脱塵埃、縦雖遭遇風霜虐、不似芭蕉葉忽摧、

武知高

流店　八橋の北に一の樓閣あり之を流店といふ、柹葺にして坪數拾二餘、樓の下は機板左右に相分れ、中央に一條の水道を引き、兩側に石を甃み、其中に奇石を布置す、其石總て六個、青紫色を異にし、高さ機板と均しく、水道の兩端を隔るに、竹箔を以てし、時ありては、板を以て樓外の流を遮り、水石に激して、樓下に滲入し、或は觴を泛べて樂むべく、或は魚を放ちて游しむべく、流を隔てゝ左右に對座し、以て觀飮すべく、其四面障壁なく、清風快通し、炎熱烘がごときの時といへども、頓に爽凉を覺ゆ。往時は流店の水とて、十勝の一に數へ、其水は東に繞りて、矼頭より南に注げる渠の水と樓外にて合し、

（藤之棚之圖）

Fuji no tana (Wisteria chinewsis.)

委蛇屈曲して、八橋の下に出づ。眞に是れ奇搆といふべく、樓に上れは、三面に窓を開き、春は櫻花の爛熳たるを賞もべく秋は霜葉の燦爛たるを觀るべし。樓の東は總て櫻樹を植う、其數二百餘、春風駘蕩の時に方りては香雲漠々として、更に關斷なく、園中の花、此境を以て最もとし、花時には遊客其下に毛氈を敷列ね、樽を開きて酒を酌み、絃を弄して歌を謠ふ、其幾群なるを知らず。此地素稻田にして廣さ六反餘、常に園丁として耕耘せしめ、揷秧の節に至れは、近村の里正に命じ、民家の少男少女を率ひ來らしめ、新秧と分ち揷しめ、舊藩主、國に在れは親しく臨みて觀覽し、酒饌を賜ひ、賀儀を叙べ、其秋、穀實るに至れば、租稅の吏員と召して、檢見の法を行はしめ、藩主又親しく之を閱せしといふ。』

流店　松莊　多田省一

苔石寫基一艸堂、溪泉流貫其中央、珊々床下鳴環珮、午枕驚時梦亦凉、

春峰　西川國臣

無風我何病、牀下水泓々、不識炎陽熱、午眠夢亦清、

流店　同

あつさをもうさも流して轉寐のゆめさへきよし山の下庵

黒田愼

園のうちめぐる淸水をせきいれて夏をよそなるやまかげのいほ

岡直盧

ゆく水をせきもいれつゝすゞしさの名になかれたるいほはこのいほ

梅林　櫻林の間を穿ちて、東南に出れば一帶の梅林あり、樹の數は數十に過ぎざるも、素葩冷絕の間に、淡紅交はり、幹皆槎枒として、皆蘚之を蔽ひ、境土亦た幽閑にして、俗と離れ、其百花未だ唇を閉すに、先づ獨り春を洩す。其東竹林の間に門あり、園外に通ず、之を東門と云ふ。門の內に、一條の徑路北に通す。之を櫻の馬塲と唱ふ。

梅林　春峰　西川國臣

帶雪淸香動、滿林春色回、此間尤快意、仙鶴尾吾來、

藤　琴泉

（蘇鐵之圖）
Sotetsu (sago-palms.)

名苑尋梅蹈雪行、早梅衝雪暗香生、梢頭也有朦朧月、雪與梅花分外淸、

千溪　藤波鍫次郎

老鶴導人沓還過、纎塵絶處暗香多、倚蕭々竹屋檐角、交淡々煙池水阿、微笑觀花憶迦葉、晩參待月學維摩、與渠同瘦嶒峻骨、奈此春寒料峭何、

櫻馬塲

太田原亘當

のる駒のたつなとるてもにほふなり
さくらの馬塲の花のは春かせ

池村久子

のる駒のいなゝくこゑものとかなり
さくらの馬塲の花の眞さかり

島村清則

治まれる御代の御蔭と諸人の
よそりてうたふ花の木の下

聞くからに人のこゝろそ勇まるゝさくらの馬塲にいはふ春駒

西川國臣

（流店之圖）
Riw ten.

利休堂

櫻の馬塲を南に往けば利休堂あり、西北花交の瀑布に對す。素岡山藩老伊木忠澄、千家の製に倣て、之と其別莊に建しものにて、其製艸葺にて、屋根裡と天井とし、三疊中板にして、正面に敷板あり。其奥に圓窓を設け、障紙にて之を隔て、其内板敷にして、利休居士の像を安置せし處、今は亡し。二の間は二疊、隅、爐にして爨室附屬し、杉皮もて葺きたる待合の腰懸あり。其構造雅致ありて、毫も眞物に異らず。茶博の喜ぶところにして、原は花交の瀑布を望むために、設けしも、今は專ら茶讌の用に供し、時に風騷の客の憩ることもありといふ。」

利休堂　松莊　多田省一

有客茅亭來煑茶、輕烟一縷繞庭柯、苔痕埋徑青三寸、墜葉風翻幽趣多、

利休堂

世の塵をさけてけふしな木の芽煎るけふりをおのか籬にはして

西川國臣

（梅林之圖）
Plum forest.

花交瀑

梅林の西、流店の南、雜樹叢生し、其間を過ぎて溪壑の趣きを窺し奇石錯落たるの間に一道の懸泉ありて東に落るは、花交の瀑にして其溪壑に沿て、一路縈回し、西東に通ずる者は、岐蘇谷と稱し、其東に極まる所、忽ち一の孤池を見るは、花交の池にて、即ち泉水の渚留する處、一隅に閘門を設けて、水溢るれば、之を曠川に注ぐ。池の廣さは、東西拾二間餘に開き、其長さ南北三拾五間餘に延び、其周圍九拾二間に餘り、瀑布の落る前に方りて、一の小き嶋あり、百石島といひ、其上に松樹を植ゑ、又燈籠を置き自から雅趣を存せしも今は之を他に移したり。往時十勝を撰びし時、花交瀑亦其一に數へらる。」

花交瀑　　松莊　多田省一

兩崖竹樹自蒼然、戞玉鏘々知庭邊、只道谿頭到驟雨、不知林底有飛泉、　　春峰　西川國臣

(花交池利休堂之圖)
Kako no ike, and Rikiw do.

溪間霧散角巾露、半日賞遊忘午炎、妙句愧吾難寫得、飛花撩亂水晶簾、

花交瀑　　西川國臣

筆とりていさや寫さんちる花をぬきてそ落る瀧のしら絲

　　岡直盧

いはかどにおちくる瀧のしら玉とあらそひちるや花さくらはな

花交の瀧の秋の氣色を　　瀬川則孝

いはかどにくだくるたきのしら玉をひろふかことくちるもみちかな

唯心山

は園の中央に崛起するところの丘山にして、園中第一の勝景なり。廉池軒よりもれば、水に沿ふて行く百歩餘にして達もべく、流店よりすれば、其西北の後に連り、全山樹木繁茂し、亂石突屹し、更に寸隙の地なきがごとく見ゆるも、樹木は皆矮くして、石亦布置宜しく、其間に小徑を通じ、三方に上下すべく、山頂較や平坦

(唯心山之圖)
Yui shin zan.

にして、遠望に富み、園中の勝景は總て眉睫の間に來り北は遠く龍山の山脈と望み、時に瀛車の黒烟を吐て走るを認むべし。其側に一小亭あり、東北に向ひ、草葺にして二坪餘、其形六角にして、板を敷き、檻を設けて人の憑るに任ず。最も觀月に宜しく「唯心堂月」と唱へて十勝の一に數ふ。杜鵑花と白躑躅と山の大半を蔽ひ、初夏の候は紅白、色を爭ひ、其美言ふべからず。』

唯心山　　松莊　多田省一

縁園紅擁小崖嵬、一歩一吟佳景開、或怪化工
針手妙、園中繡刺此山來、

島の茶屋

唯心山を北に降れば、其前に方りて池あり。水面五反七畝、周圍百八拾五間、東西五十間餘、南北三十五間餘、園中第一の大池にて、其東北に島嶼三つと築く、其中一は南に在りて、陸に近く、一は西北に位し、一は又其北に立つ。南島へは板橋を架て、往來を通じ渡れば則ち島

（池北より中之島唯心山及城閣を望む圖）

View from north side of the pond.

の茶屋にて、柿葺一棟、席を二つに分ち、一を四疊半とし、一を二疊とし、四方に矮松を繞らし、怪石白沙の中に立ち、自から海島の趣をなし、全く天然に出るもの〻ごとく、其側水中に石標を建て表に『上道郡』の三字と彫り裏に『境澤』の二字を刻めり。南島より獨彴を隣島に架て、往來と通ず渡れは、亦松翠沙白、池水岸を洗ふて、宛も海島のごとし、此處亦、石標を建て表には『御野郡』の三字を刻み裏には『みのしま』の四字と彫る。斯園原御野上道の二郡に跨り、兩島の間、其境界なるゆゑ之と『境澤』といひ、一の島は御野郡に屬するゆゑ『みのしま』と名けたるならん『みのしま』の西北の隅に、一間四方の釣臺を、水中に設け、竹と並べて屋となし、素樸にして雅致あり。此邊嘗て蓮多く生じ『境澤の蓮』とて亦十勝の一に數へられたる處なり。其の北に方り亦、一小島ありて、全島白沙より成り。上に一樹の低き松ありて、偃蓋地を

（中之島之圖）

Nakano shima (Middle island.)

蔽ひ、其側に大なる石燈籠一基を置き、常に白鶴の來りて池魚を窺ひ、眞に蓬萊仙島の趣を成す。島の茶屋より南を仰げば、岡山の城閣、屹として天半に聳ゆるあり。其景の佳なるは夕陽西に舂き、晩鴉塒に還るの時に在り。」

中之島

緑蒲紅蓼滿塘秋、晩上池臺意自幽、鶴唳一聲露華落、恍疑身是入蓬洲、　春峰　西川國臣

湖心有此別寰區、瀲灩波光島影孤、無乃乘槎求藥客、宛然壹個小蓬壺、　松莊　多田省一

中の島

行幸せしむかしのゆめやむすふらんなかの島わにたつのねふれる　久山信息

沖つすにたつのねふれるさまみれば池の心ものどけかるらん　岡直廬

三つ栗の中のしまなる松かけはなつきてすゞむ所なりけり　太田原眞當

鏡澤

たづのすむ鏡の澤に君か代のくもらぬ千代のかけそ見えける　中塚正齊

新殿は園の東北隅に在りて、櫻の馬場の北端に方れり。坪數は八坪餘にて席拾疊を容る窓を披けば、園外の曠野亦眸裏に入り、東西は「千入の森」と稱し、石標を建つ、楓樹數十株天を蔽ひ秋霜一たび至れば、滿目の錦繡燦爛として、蕃も亦及ばず。斜陽相映するに方りては、四邊に照射し、一段の奇觀を呈し、眞に二月の花よりも紅なり。其下皆蘚地を蔽ひ香氣掬すべし「千入の紅葉」亦十勝の一なり。森の東南に稻荷祠と辨才天祠あり、稻荷祠は往し年東京の舊備前藩邸より移せしものにて、拜殿あり、辨才天祠は拜殿及び繪馬堂あり。千入の森を西に過れば、井田を設けし跡あり。往古の稻田に接す、井田は藩祖光政侯寛文年間和氣郡に設けられ其地を井田村と名けられしに傚ひたるものにて、古昔の租法を試みるの地たり。

（新亭及楓櫻林茶園之圖）
Shintei, maple and cherry forests, and tea farm.

其北に茶園數畝ありて、往時は製茶師に命じて、茶を製せしめしとぞ。其北に一帶の堤ありて、結縷草を敷き、諸所に松樹を植う、其上に上れば、園外の平

時、田家ナテは曠川を上下するの舟に至るまで、皆眉睫の間に聚る。堤を西に下れば、稲荷祠にて、瓦葺の拝殿あり。」

千入の森

露しものあきのさかりのもみちはにいまひとたひの御幸ともかな　太田原眞當

もみち葉の千入のもりはくれやらでよその梢をわたるつきかな　正八位 河合就義

白露はいかにそめけんくれなゐのちしほの森の木々の紅葉　高柳秀成

紅葉のちしほの森にきて見れば梢はかりそくれのこりたり　淺野駒子

久方のくもゐの庭のあとゝめてちしほの杜はにしきなりけり　岡春能

もみぢ葉の千入のその狩くらに鹿のねはかりきゝもらしつゝ　川崎田豆雄

名に染しちしほのもりのしたてりに秋はやふへもしるすそありける　岡直盧

いく秋のしくれにかくは染出て千入のもりの紅葉しぬらん　中塚正齊

木の本に遊へるたつのいたゞきもれなしにはひの園の紅葉　片岡寛

てりわたる紅葉みなれて歸るさは道たとくし夕月のかけ　岡田輔文

秋のいろの千入の森のもみちはゝそのふの池もさむるはかりに　國富直麿

いとはやも多はきにけり紅葉の千入のもりにあきを残して　西川國臣

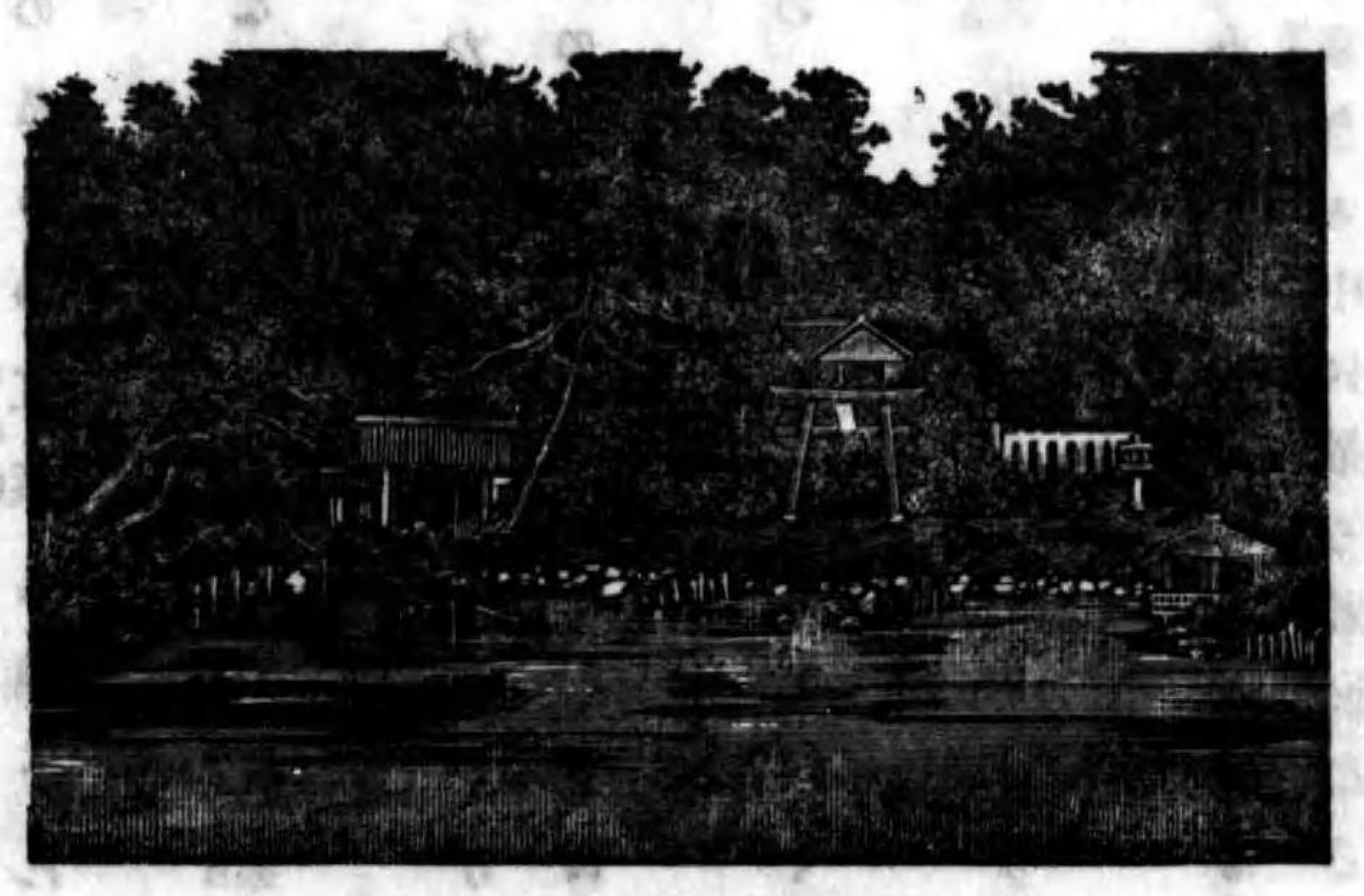
御幸ありし年よりいとゝはえあるは千入の森の紅葉なりけり　加藤秀徹

名にしおはゝ千入に染よ明日もまたきてみんものを森のもみちは

由加神社—慈眼堂

園の中には神社佛堂數多きが、中に最も壯麗なるは、由加神社と慈眼堂の二なり。由加神社は稲荷祠の西に在り、本堂は銅の室にて拝殿、繪馬堂、祭器の倉庫まで、皆瓦屋にて備はり、前に石の華表ありて、蕃

主慶政侯の筆にかゝる神號の扁額を掲げり。此神社は原東京なる大名小路の舊池田家藩邸の内に在りしを、廢藩の明る年、此地には移せしなり。其西に隣れるは、則はち慈眼の堂にて、觀音佛を祀る處、澤池に面ひて、仁王門を建て、左右に安置せる仁王の像は、高さ六尺餘、門の上に扁額ありて、如意輪の三字を題す。其側方一間の梵鐘堂を築き建て、其下に三角形の敷板を設けたり。佛殿は巨石を疊みて礎とし、石階を設けて、上下に便にす。其高さ一丈餘上に建てたる伽藍は三坪に餘り、其中に本尊をば安置せり堂の前には舞臺ありて、坪數凡そ三。樹木繁茂して、蔭森四面を蔽ふ、堂の側に巨石あり。素犬島の産にして、高さ二間餘周圍九尋ばかり、一旦割りて此地に運び、再び合せて原の形に復せしものにて、其名を烏帽子岩とは唱ふるなり。其側に常盤の松とて、一樹の巨松挺立し、往古は「慈眼堂の松」



（由加神社及慈眼堂之圖）
Yuga-temple and Jigendo.

とて十勝の其一に數へられしも、今は早や全く枯て松籟の響を絶しは惜むべし。近頃由加神社と慈眼堂の邊に一の掛茶屋を設け、池の畔に腰掛を備へ、茶菓を賣る者あり。試みに歩を此に駐めば、近くは中の島唯心山、遠きは岡山の城閣まで總て手に取るごとく一椀の茗を啜りて、這風光を領す、亦是一快適といふべきなり。』

寒翠細響軒　慈眼堂と出でゝ池に沿ひ、西に往けば腰掛茶屋あり、水に臨みて設け、憩息の便に充つ、草葺にして長さ四間餘、北は障壁なく、南は窓を披きて、池を臨む、中に扁額と掲げ、東海道五十三驛の圖を畫き、一々地名を附けり。其西に方り池の盡る所、小き亭あり、草葺にして席四疊半、是れ寒翠細響軒にて、軒號の扁額を掲ぐ。南は鶴鳴館、延養亭、廉池軒、島の茶屋、唯心山、サテは岡山の城閣を望むべく、園の大半は明かに眺むべし、北は一帶の松林にて、颯爽の音聽くべく、園の風光を領せんと思はゞ、先づ此邊より望むべし。軒の西北は松樹矗立し、孰れも幹老い、枝繁り、數十畝の間虬影相交はり閑雅趣を成す。其北に廣き馬場ありて、長さ九十間餘、北は竹林に沿ふて、其塢に近頃櫻樹數株を植う。其中央の南、松林尽る處に觀騎亭あり。廣さ七坪、總体草葺にて、席は二室に分ち上下二段とし、一は六疊、一は七疊半なり、北は快く

開きて騎馬の馳驅を見るべく、其側に一條の溝渠ありて、水は園外より入り、馬埒の底を貫ぬきて、茲に出で、南に注ぎて、延養亭の前を回り、諸所に分派す。是れ曠川の支流を園の中に通ずる源にて、東西の溝渠、大小の池沼、皆之に養はれざるなし。松林の西に雜樹三方を圍み、中に、東西十三間、南北六間餘の隙地あるは射圃にて、西に射場と設け、東に垜を置く往時射を習ひ銃を試みたる處にて、射場は草葺拾七坪餘あり、其後の屋宇は射手の溜所あり。其南に接きて、柿葺の屋あり。觀射の亭にて、廣さ四坪餘、室を分ちて、二となし、一を四疊とし、一と四疊半とす。舊藩主の臨みて弓銃を試みるを視るところなり。射場の北に方り、一區を畵し、山茶花、林を成し、又椿、木蓮其他奇樹を植う。之を北に出れは馬埒に入る處にて、左に衡門ありて、其外は別に區域を爲し、其北に閑谷神社遙拜所あり。神社は舊藩祖を祀る處

(涵翠細響軒之圖)

Kan swi sai kio ken.

にて、此地は暫杆とゝもに今尚池田家の私有に屬し、毎年四月十八日閑谷神社の祭典を執行するに方り、北門を開き、衆庶の參拜するを許し、園の內外に露店を張り、有志の武技を試み、頗ふる雜沓を極む。觀射亭の南に出れば、則はち園に出入する表門にて、鶴鳴館の玄關は其南に在り是に至りて斯園を一周し了れり。其間尙樹木等の記すべきものあるも、其微細なるものは略しぬ。若し夫れ其光景風致に至りては余が禿筆の能く寫す所にあらざれば、斯園に遊ぶ人の之を眞景に照して、細かに評するを俟つと云ふ。

後樂園眞景及詳誌終

後樂園眞景及詳誌附錄

後樂園に遊はんと欲せは先づ其心得と知さるべからず而して園の亭舍を借んと欲せば先づ其手續を經さるべからず。今其心得と亭舍の借料を揭けて斯園に遊ぶものゝ便に供せん。」

一園內の縱覽時間は午前九時より午後四時までとし雨又は雪等にて園庭の泥濘と積むときは縱覽を許さず。」

一園內の家屋又は範圍を設けたる塲所には許可を得ずして立入るべからず、其家屋を借らんと欲するものは園の看守に就きて問ふべし、其借料は左のごとし。

鶴鳴館	八拾錢
茂松庵	參拾錢
廉池軒	四拾錢
流店	參拾錢
嶋茶屋	參拾錢
釣殿	五錢
唯心	五錢
新殿	貳拾錢
觀騎亭	貳拾錢
觀射亭	拾錢
寒翠細響軒	拾五錢

一園內に放養する所の鶴を玩弄し又餌料と投與すべからず。」

一園內に於て火を焚き、又火技を弄し、或は建物に接近せる塲所にて喫烟すべからず。」

一園內に於て土石を採堀し、又は花果を摘取り枝幹を折傷くべからず。」

一園內に於て魚鳥を捕獲し又は土石等を泉池に投入すべからず。」

一園內に於て露店を開き商品を羅列し又は徘徊觀を演ずべからず。」

一園內に於て便所の外に大小便をべからず。」

一園內取締人の制止は總て之に違背すべからず。」

一犬を牽き園內を縱覽すべからず。」

後樂園眞景及詳誌附錄終

明治廿四年七月十七日印刷
明治廿四年七月十八日出版
明治廿五年八月十四日訂正增補第二版印刷
明治廿五年八月十五日訂正增補第二版出版
明治廿六年四月十七日訂正增補第三版印刷
明治廿六年四月十八日訂正增補第三版出版
明治廿七年十二月十四日訂正增補第四版印刷
明治廿七年十二月十二日訂正增補第四版發行

版權所有

編纂兼發行者　岡山縣岡山市大字上ノ町六十一番邸　北村長太郎
印刷者　岡山縣御野郡鹿田村大字大供六十九番邸　松井壽士郎
發行所　岡山縣岡山市大字上ノ町六十一番邸　細謹舍
Printed and Published by Saikinsha, No. 61 Kaminocho, Okayama, Japan.
印刷所　岡山縣岡山市大字東中山下十四番邸　文友舘

GUIDE

TO

KORAKUEN

WITH

MAP

AND

ILLUSTRATIONS.

GUIDE

TO

KORAKUEN

BY

KENRIU ODA

Okayama's Pleasure Park.

One of the first places I visited on coming to this city fifteen years ago was the beautiful Ko-Raku En. It will be one of the verv last to which I shall wish to say farewell when my time comes to leave Japan.

Okayama has certainly been more than ordinarily farsighted and fortunate in the location and improvement of her extensive park. The large and picturesque garden is a noble moment to the memory of Tsunamasa Ikeda, Bizen's public spirited lord two centuries ago.

An old castle rises on the opposite bank of the Morning Sun river, which just here makes a gracefull double bend in oder to wind itself lovingly around both park and castle. All combine to complete a perfect picture of wich nature and art were the twin painters.

No wonder it is the pride of the city. It deserves to be, and every loyal resident of Okayama might fearlessly adopt as his motto the word of an old time English prince-

"He who sees my park sees intn my heart".

James H. Pettee.

Okayama, Higashi Yama, Dec. 16, 1863.

I introduce this little guide book of the beautiful park Ko Raku En to the travellers who come to visit the city Okayama. The park is indeed a splendid specimen of Japanese gardening, and every visitor wonders how far human genius can compete with natural beauty. The name Ko Raku En is taken from a well known phrase of a Chinese classic that means, " one who governs others ought to take pleasure after the governed are all well pleased, and ought to take pain before the governed feel pain." The founder of the park was the famous Daimio Ikeda, and the park is placed within the wall of his former castle. It was finished in the year 1690. Since the feudal system was abolished in the empire, the gate of the park has been opened to the public.

Tokio, Aug. 1893. Y. Sakatani.

GUIDE TO KORAKU EN.

The garden is usually approached by crossing the bridge called Tsurumi-bashi leading to the north gate. At times, when the castle is open, there is a ferry from there, across the river to the south gate.

At the end of the bridge stands the outer gate of the garden, and, on the left, a building called Zan Ken which is reserved for the private use of the Ikeda family, the former owners of the garden. Passing between two long rows of buildings, formerly occupied by those in charge of the garden, the inner gate is reached. On the left stands the building called Kwanko formerly used as a residence for the children of the *daimyo*.

The keeper lives on the right of the gate, and to him application is to be made by those wishing to hire any of the buildings for the day.

In front of the gate are two old pine trees one of which, like many other trees in Japan, is fancied to resemble a dragon in shape.

KWAKUMEI KWAN. Turning to the right to make the circuit of the garden, this is the first building seen. It has been changed into a large hall in late years to adapt it for the use of the Local Assembly and other large meetings. The glass windows contrast oddly with the medieval style of the building, covered, like the other buildings in the garden, with a low heavy, overhanging, thatched roof.

ENYO TEI, near by, is the finest building in the garden, and was the first one erected. It was the reception hall, and it was there that His Majesty the Emperor stayed during his visit to the city in 1885.

Here in olden times the daimyo heard lectures by scholars, and received other daimyo during their visits. The best view of the garden, as a whole, is obtained from this buildnig.

BOKO KAKU, or EI SHO. Turning to the rear of Enyo Tei, the pond Kwayo no Ike is seen. A good view is obtanied from BO KO KAKU, the building joined to Enyo Tei by a long gallery.

This gallery is constructed, like similar galleries in other buildings in Japan, so that no one can walk over it without making a creaking

noise, and so warnieg occupant of the building of the approach of possible danger.

On the opposite shore of the pond stands a lage rock (Odach Ishi) 25 feet high, and 50 feet in circumference, which, cut into 90 pieces, was brought from Inujima, an island ten miles distant.

Trees grow out of cracks in the rock, and there are few signs of its artificial erection. Near this building is a platform on which the intricate dancing, or rather posturing, of olden times was performed.

MOSHO AN is built behind the rock in the shades of a wood of old pine trees, cryptomeria, and maples, a cool retreat in a summer day.

In it the elabolate tea-drinking ceremony was performed.

SHITENO DO is a small Buddhist shrine on the edge of the garden. Before it stand the usual stone pillars for holding lights, the stone basin for holding water of the ceremonial purification before worship, and a box for receiving offerings of rice, or money. Hung before the shrine are crudely colored pictures, the votive offerings (*ema*) of those whose prayers had been answered.

Near by stands a tall Ichō tree (*Salisburia Adiamtifolia*), often planted near temples, with its fern like leaves.

On a promontory jutting out into the pond is a typical little Shintō shrine, with it bark roof, looking just like the shrines seen on almost every mountain, so naturally have all its surroundings been placed.

Skirting along the edge of the garden, fenced in by tall bamboo plants, a little garden of the species of bamboo whose young sprouts are used for food, is passed. Beyond this a good view is obtained of the grass covered expanse in the middle of the garden, an unusual sight in a country where lawns are practically uuknown.

RENCHI KEN is the next building reached, standing on the edge of a little pond called Renchi, and near the south gate. Behind it, beyond the bamboo grove, runs the Asahi river, and there may be heard the creaking of oars, and the songs of the boat-men as they

stream. From this house the best separate views of the garden are to be had, and it is the favorite house for parties of friends to rent for the day.

FUJI NO TANA. The path leads between a trellis of Wistaria and a grove of palm trees (*Sotetsu*). At the near end of the trellis an old plum tree sprawls, called garyo-bai because of its resemblance to a dragon. The first trellis is covered with white flowers in the early spring, and the second trellis, stretching over about 30 yards, has flowers of the usual color. Some 20 or 30 palm trees grow up near by from the sand covered ground. At rare intervals the crown of broad evergreen leaves, at the top of the short rough trunk, opens with a cluster of jewels, the crimson fruit of the tree.

To add to the contrast of plants, several varieties of sweet flag are planted in a pond near the plum trees. From this point a turn must be made back toward the entrance. A stream running over a gravelly bed is crossed by a curious zigzag bridge of eight single boards, laid in an imitation of a well known bridge in the province of Mikawa.

RIYU TEN stands at the foot of the hill in the centre of the garden. It is the only two story building in the garden, and the ground floor is oddly divided into two parts by a stream of water running nearly level with the mats. With the sliding doors removed the guests sat on either side of the running stream, as though out of doors, floating over to one another wine in the wooden wine-cups. In the great flood of 1893 this placid wine bearer was changed into part of a great sea covering the garden, and the whole surrounding plain, and reaching to within a foot of the ceiling of this house.

CHERRY GROVE. Turning again in an eastward direction the way leads though a grassy field of an acre and a half in extent, full of small cherry trees planted with studied irregularity. In the flowering season these trees are lovely, as only Japanese cherry trees can be lovely.

Thither, at that time, resort crowds of people to sing and play, to eat and drink. Formerly there was in this place a rice field culti-

vated by boys and girls brought thither by the head-men of the neighboring villages. At harvest time the tax collectors gathered, the crop was estimated, and the tax for the year in the region governed by the feudal lord, the daimyō, was fixed in accordance with that estimate.

PLUM GROVE. Wandering through the cherry trees, and passing along the bank of a third pond, the next attraction is a score, or more, of plum trees which blossom in the winter when, save the camellia, all other flowers are closed.

RIKYU DO is a small house in the corner of the garden, named in honor of Rikyu, the elaborator of the tea-drinking ceremony. It is built in accordance with the canons of Senge governing the style of such houses. In one room is an alcove, with a round window, in which a statue of Rikyu formerly stood. This house once belonged to Igi Tadazumi, a steward of the daimyō, and was moved into the garden.

KAKO WATERFALL. A dell containing many kinds of trees, and oddly shaped stones has been so contrived that the water falls into the pond in front of Rikyu Do. At the foot of the waterfall is a small island, called Hyakkoku-jima, once covered with pine trees and stone lanterns, but now bare and unattractive. From this pond the water, after having been led through the garden by many devious ways, finds its way back into the river. Formerly there were the "Ten Scenes" (Jissho) of the garden, one of which was this waterfall.

MAPLE GROVE. The circuit of the garden being now about half made, the way back leads through the plum trees to a grove of various kinds of maples, beautiful in autumn, and forming another of the "Ten Scenes". On a small stone in the northern part of the grove are cut the deographs for *Chishio no Mori,* literally the Blood-red Forest, a name referring to the deepness of those scarlet hues, said in poetic phrase, to be, "more beautiful than flowers in spring".

SHRINES OF BEZAITEN AND INARI. On the edge of the grove is a small shrine for the worship of Bezaiten; the goddess of wealth.

Next to it stands a small, white walled, fire-proof store-house seeming oddly out of place in such surroundings. By its side is a shrine of Inari, the god of the rice. This shrine was brought from the Ikeda mansion in Tokyo.

SHIN DEN. Passing by a small house of this name, built on wooden posts, a path leads along a bank capped with an evergreen hedge about three feet through and trimmed with a flat table-like top. From this one place, and from the hill in the middle of the garden a view of the country beyond is commanded; elsewhere the garden is shut in by high bamboo plants, and, even in this place, no view of the garden can be had from without.

TEA PLANTATION. The path leads down from the bank through some tea shrubs. From this place a fine view of the upper part of the old castle is obtained and, in the distance, on the left, a tall pagoda is seen standing solitary on the side of a pine covered hill.

SEIDEN consists of some small square plats of ground contrasting strikingly, in their evident artificiality, with the natural appearance of the rest of the garden. It was laid out in imitation of a field in Wake Gun, a district not far away, on which crops were grown for the purpose of fixing the taxes by estimation of the yield for that year.

YUISHIN-ZAN, the hill in the middle of the garden, should be visited next. It is considered one of the most beautiful scenes. It seems to be completely covered with rocks and shrubs, but, on approach, paths are disclosed carefully laid out. From the flat top the whole garden can be seen; on the north the rice-fields stretch away to the hills, and the black smoke of passing trains witnesses of changes since the garden was made. A little summer house on the side of the hill is the favorite place for looking at the moon, and for seeing the garden by moon light. The shrubs chiefly azaleas, white and red, make the hill lovely in early summer.

SHIMA NO CHAYA. Returning toward the north, and cross-

ing a quaint, highly arched wooden bridge, a little tea-house on an island, is reached. It stands in a pond of about an acre in size, the fourth, and last, pond in the garden. The house is surrounded with pine trees, and rocks, and white sand down to the waters edge, in imitation of an island in the sea. A stone post on the island marks the boundary between Joto Gun, and Mino Gun, two divisions of the province. Another bridge leads to Mino Shima, a second island on which stands a rude fishing house.

Formerly the lotus flowers about this island made one of the "Ten Scenes". The third island has on it a huge stone lantern, and a low pine tree spreading over a considerable space of ground. It is a favorite resort of the storks, who there watch for fish, and it is said to be like Horaijima, the fabled island abode of the mountain sprites, the *Sennin.*

YUGA JINSHIA. On the north of this pond is a pine wood containing many buildings. The first one is the Shintō Yuga shrine.

On either side of the entrance stands a large image of a Chinese lion made of the Imbe pottery, the dark brown ware made at a village about 15 miles from the city. Around the shrine is a fence of stone posts, each bearing the name of the donor. The shrine was moved from Tokyo about the beginning of the Meiji era(1867). On the eastern side is another shrine of Inari.

JIGEN DO is a Buddhist temple of Kwanon, the goddess of mercy. The gateway is guarded by the wooden images of the "two kings (*Nio*). Passing through this common form of gateway, a path winds up some stone steps to the temple. By the side of the temple is a small tea house where refreshments may be had. The path passes by this and round the base of another large rock brought in pieces from Inujima. It shows signs of the beating of the waves upon it in former times; and there are also, unfortunately, marks of the wedges used to rend it asunder. In shape it resembles *eboshi*, the peaked cap worn on ceremonial occasions by Shinto priests, and from this it takes its name. Nearer the gate of the garden is another tea-house bearing a sign announcing tea for one sen, and coffee

for one sen and a half. At this place photographs and wood-cuts of scenes in the garden, and guide-books are sold. A long narrow house near by has a bench for those who wish to rest, and the wall is appropriatelydecorated with a kind of birds-eye view of the Tokaido, the road between Kyoto and Tokyo. After the manner of Japanese maps, the tablets set up here and there contain the names of the 53 post-stations. The time allowed for this journey of about 330 miles was 20 days.

KANSUISAIKYO KEN is a small house on the edge of the pine wood commanding a good view of the brown trunks of the pine trees, and the stretches of water and sward, across to the southern edge of the garden.

KANKI TEI in the wood, on the edge of a race track is the grand stand of the race-course, and is placed near the middle of a straight track 180 yards long. Under the track is an aqueduct by which water is led into the garden. Generally, though the four ponds are full, there is no running water in the garden. Water is brought in on special occasions, but some mills for cleaning rice have been erected recently, and compensation has to be made for diverting the water from the mill-races.

ARCHERY BUTT. In the corner near the end of the race track is an archery ground where the sport is, even now, sometimes practised. The length of the range is 78 feet. A small building serves for spectators of the sport.

STORK HOUSE. By the side of the entrance is the house into which the storks are put at night, and in which, in the flood of 1893, two of the birds ended unnaturally their alloted term of a thousand years. They were at that time about 200 years old. Ony two now remain; theywalk about at will, and occasionally raise their harsh cries—cries which, according to a Chinese saying, reach to heaven. An allusion to this saying is contained in the name, kwakumei, of the large hall. It means literally "stork cry", hence something surpassing like the far reaching cry of the bird.

The derivations of the names of some of the buildings are obscure. The last words of the names as written in this book stand for a building of some kind, and the variety used is evidently designed.

In conclusion it may be said that the rules for visitors are those usually observed in public gardens. No food must be given to the storks, and dogs must not be taken into the garden. The gate is opened at 9 a. m, except at times when the weather is bad. Any house may be hired for the day on application at the gate-house for a price ranging from five sen to eighty sen.

15
281

終

帝國圖書館